
翻訳と解釈

上原麻有子*

「翻訳」という行為には「解釈」という過程が伴う。このことは、ごく普通の視点から考えてみても容易に察することができるであろうし、翻訳の経験があれば、さらによく実感できるはずである。フランス語のイディオム、À votre santé! は、各語の標準的意味を尊重して翻訳すると、「あなたの健康に！」となるが、幾分、語調の滑らかさと分かりやすさを補いたいなら、「あなたのご健康を祝して！」としてもよい。「祝す」相手が複数で「あなたたちの」であるのか、「皆さまの」とした方が日本語らしいのかなど、翻訳の可能性をさらに追求めることは自由であるが、この表現を使う場面を日本文化に置き換えた場合、「乾杯！」がその精髓としての翻訳表現であろう。要するに、「乾杯！」は、À votre santé! の文化的文脈を考慮した上での実際の解釈なのである。

日本の翻訳文化において、明治 10～20 年代、盛んに行われた「翻案」あるいは「豪傑訳」は、「原作を換骨奪胎して自在に語り直したもの」¹⁾、つまり原作の脚色であった。ここでは、さらなる確実性をもって、解釈が翻訳一見方によっては創作一の方法と同化している。従って、翻案は解釈の産物だと言っても差し支えない。一方、フランスでも 17 世紀、「不実の美女 belle infidèle」²⁾ と呼ばれる翻訳法が、ようやくギリシャ・ラテン文化崇拝を脱し、フランス文化の優越を誇るに至った古典主義の主流をなしていた。読者に訴えかける美文を織り出すためには、原作に「不実」であることも厭わないという翻訳法であり、これによってかなり自由に原作を解釈し直してしまったようである。

解釈が翻訳の基部として働くこと、また、しばしば解釈が翻訳と同一視されることにも取りあえずは納得がいく。以下に紹介する、より専門的に翻訳を扱う分野においても、解釈は必ずその不可欠な一側面として際立っている。しかし、翻訳は解釈なのであろうか。両者の類似性は疑う余地もないが、完全に同一視することは果たして適切なものか。類似性を疑えないからこそ、また、境界線は定め難いからこそ、翻訳と解釈の差異について問題視する必要があるものと思われる³⁾。

本小論では、翻訳研究における「解釈」の問題について考えてみる。まず、語源の確認を行い、次にフランス人翻訳学者、アントワーン・ベルマンの研究を参照する。また、翻訳研究は、現在、新しい学問領域である「翻訳学」として発展しているので、その概要を紹介しておく。

ヨーロッパにおける「翻訳」と「解釈」の語源的つながり

まずは、フランス語の *traduction* (翻訳) と *interprétation* (解釈) の関連を、それらの語源を遡って確認する。日本文化における「翻訳」と「解釈」の問題には立入らず、翻訳学発生の地であるヨーロッパ⁴⁾の言語について認められている事柄にのみ言及することを言い添えておく。

traduire (翻訳する)、*interpréter* (解釈する) は、どちらも *hermèneuein* というギリシャ語起源の動詞である。*traduire* は、直接にはラテン語の *traducere* がフランス語化したものであるのだが、では、この *traducere* は *hermèneuein* がラテン語に翻訳された動詞かという、そう単純にたどり切れる関係でもない。そこには、翻訳に対する、あるいは外国語に対するギリシャ人の認識のし方が問題として浮かび上がる。

ギリシャ語の *hermèneuein* は、「解釈する *interpréter*」「説明する」「表現する」のほか、詩人や巫女のような神の代弁者の役割を果たすという意味でも用いられたが、もとより「翻訳する」を意味する語ではない。例えば、アリストテレスの *Peri hermêneias* はラテン語で *De interpretatione* と翻訳されており、フランス語でも *De l'interprétation*⁵⁾ であるが *Sur la traduction* つまり「翻訳」の語によって翻訳されることはないという。そもそも、いかなる語もギリシャ語においては「翻訳する」「翻訳」を端的に表わすものではなかった。しかしながら、そう翻訳できる動詞は他に複数存在した。翻訳の地位のこの曖昧さは、「ギリシャ化する *hellénizein*」とはつまり考えを明晰に述べることだとする、ギリシャ人の単一言語主義に原因があるらしい。そして、この「ギリシャ化する」は文明化を含意し、当然のことながら「ギリシャ語を話す」という意味で用いられた。また「ギリシャ語を学ぶ」こと、「外国人 *barbaros*」を「ギリシャ化する」ことでもあった。さらに、「ギリシャ語で表現する」との意味も加わるが、これは本質的に聖書翻訳を示したのである⁶⁾。

hermèneuein は、最終的に「翻訳する」という意味を得ることになるが、この過程には、紀元前3世紀からアレキサンドリアで始まった旧約聖書翻訳という形によるユダヤ文化の享受があったのだ。「翻訳」という行為は明確に認識されるに至り、この「翻訳」と呼び始めたものにおける新しい語彙、語法、ディスクールの基本原則が成立した。普遍的精神の言語たるギリシャ語は、こうして聖書の言語となったのである。この「七十人訳」または「七十二人訳」と呼ばれる旧約聖書のギリシャ語翻訳は、原典解釈の作業をとおして *hermèneuein* の内に *traduction* と *interprétation* を結んだ。この連関については、ユダヤ人哲学者、フィロン（紀元前25～紀元後45/50）も考察している。まず、思想や精神の「解釈者 *hermèneus: interprète*」としての言語 (*logos*) という基本がある。これは、神の語る言葉 (*logos*) の解釈者はモーセだということを説明するものである。神のロゴスが聖なる律法において表わされているなら、モーセはこの律法についての解釈者、預言者なのだ。ところが、モーセ自身も自分を表わす解釈者が必要である。という具合にフィロンの見た預言者・解釈者の連鎖において、翻訳者 (*traducteur*) と注解者 (*commentateur*) はそれぞれインスピレーションを受ける者として、同等に位置づけられている⁷⁾。

では、*hermèneuein* を巡り連関する *traduction* と *interprétation* について、その差異を示すことはできるのか。聖書の翻訳者は、原典を文学的に変更するまで翻訳を徹底し、特に

「箴言」では新しいテキストを生み出したのだという。しかし、文学的コノテーションと詩情を盛り込み原典を書き直してしまう者は、古代ギリシャにおいては、翻訳者ではなく解釈者と見なされたのである。そのようなギリシャ語の聖典にも翻訳を認めるとすれば、それは万難を排して確保されている聖書からのメッセージの部分である⁸⁾。文学性も音楽性も隠蔽したところのみで伝えようとする、原典の純粋なメッセージ、あるいは意味があるなら、その伝える行為、伝えられたものが翻訳ということになるだろう。

ところで、ラテン語の *traducere* がフランス化された形の *traduire* がフランス語の語彙に加えられたのが1520年、一方で、ラテン語の *interpretari* もフランス化され *interpréter* となった。ローマはギリシャから学び、ギリシャ文明を翻訳し、翻案することでラテン語を洗練していったのだ。しかし、古代ローマにおいては、翻訳の方法や基準はまだ不明瞭なもので、聖ヒエロニムス(340頃～420)が、405年に聖書のラテン語訳(「ウルガタ訳」)を出す以前、翻訳と翻案の区別、また原典への忠実性は問われなかった⁹⁾。*traducere* は元来「翻訳する」を意味せず、「その先へ導く」という程度の漠然とした意味しかなかった。ローマ人は、ギリシャ語とギリシャ文化を受容しつつ「翻訳する」という意味に気づき、それを掘り下げた。そして、後に、動詞 *traducere* はフランス語で *traduire* と訳されるに至るのである¹⁰⁾。これに対し、*interpretari* はもともと、他のラテン語の動詞、*convertere*、*exprimere*、*transferre*、*imitari* などと共に「翻訳する」「翻案する」を表わしたので、*trraducere* が「翻訳する」の意を獲得するまでは、「説明する」「解釈する」「明らかにする」に加えてその意味で使われていた。

また、*interpréter* つまり「解釈する」の関連として、フランス語の *herméneutique* という語がある。「解釈学」「解釈」「聖書解釈学」を意味するのだが、この語も *hermèneucin* を起源とする。古代ギリシャの、特にユダヤ・キリスト教の伝統においては、「解釈術」として理解されていた。これは、聖典あるいは非宗教的なテキストの釈義、文献研究のことであり、解釈するための方法論の考察でもあった。17世紀には、神学、法学、医学に適用されるべき「一般解釈学」の構築が試みられる。19世紀初め、シュライアーマハー(1768～1834)が解釈学に転機をもたらす。理解や解釈に関する技術の原則は体系化され、独立した「学問」としての近代的な解釈学が成立する。その後、ディルタイ、ハイデガー、ガダマーにおいて解釈学は「解釈学的哲学」となり、現代のドイツ哲学の一系譜を形作ったのである。実は、このような歴史をたどってきた19世紀以降の解釈学は、これから紹介する現代の翻訳学と接点を交えているのである。

「翻訳学」という学

翻訳の歴史は古く、古代エジプトやメソポタミアでもすでに行われたように、この活動は文明の誕生と共に始まったとも言える。世界の至るところで、文化交流に伴う翻訳実践の歴史をたどることができるが、しかし、新しい「学」としての「翻訳学」は、翻訳史や翻訳実践を包括する関係にはあっても、いずれとも同定されてしまうものではない。日本では一般に名称からして浸透していない領域であろうから、ここでその概略を示す意義は、十分見出せると思われる。

「翻訳学」は英語では translation studies、フランス語では traductologie、ドイツ語では Übersetzungswissenschaft と呼ばれ、20世紀後半に西洋で生まれた「翻訳という現象と翻訳者にまつわる複雑な問題」¹¹⁾を扱う科学である。英語圏での研究に先鞭をつけたアメリカ人翻訳学者、ジェイムズ S. ホームズ (1924~1986) は、このように述べている。また、フランス人翻訳学者、ジャン＝ルネ・ラドミラル (1942~) は、翻訳学を「翻訳についての論証 discours-sur la traduction」、同時に、翻訳という実践のための「実践の科学」、また「反省的」あるいは「認識論的」科学であると定義している¹²⁾。この一見矛盾とも取れる観点は、ラドミラルの哲学的翻訳論の根幹をなすもので、彼はこれを「翻訳哲学」と呼んでいる。

さて、1950~1960年代に翻訳学の幕開けとして発表された一連の研究は、ジャン＝ポール・ヴィネイとジャン・ダルベルネの英仏比較文体論、ジョルジュ・ムナン (1910~1993) の『翻訳の理論的問題』、自らが聖書翻訳者であるユージーン・ナイダ (1914~) によるチョムスキーの生成文法を採用したアプローチの如く、多分に言語学的研究の特徴を有していた。翻訳研究の対象は、当然、言語現実なのだが、同じ対象をもつ言語学から、その分類と概念化に必要な方法論や術語を提供されたのである¹³⁾。しかし、翻訳学は根本的に学際的であるため、それゆえに、おそらく、言語学に従属する一分野としての地位から脱し、独立を図る要求が徐々に高まっていったのだ。このような中で、日本語で「翻訳学」と表現し得るこの学の名称も使用されるようになる。

1970年代以降、翻訳学は発展し続け、今日では、多様なアプローチを生み出す最も活発な学問領域であるとされている。また、人文科学を中心とした多岐にわたる問題を探究する性質を具えた新しいこの学は、それ自身が、これまで個々の研究を体系的に自己観察する時期に達していなかった。折しも、2008年、ジェレミー・マンディの *Introducing Translation Studies*¹⁴⁾ 改訂版 (2001年初版) が、そしてすぐ翌年には、その和訳『翻訳学入門』も刊行された。半世紀の翻訳学における進展を追った専門書であるが、拡散していた翻訳学の下位分野を教科書的に分かりやすく整理し、その全体像を描き出した一冊である。ではこの書を参考に、1970年代以降の流れを簡潔にまとめておこう¹⁵⁾。

翻訳学が学としての地位を確立する上で、ホームズの貢献は決定的なものであった。それは、翻訳学の可能性を説明するために、関係してくることを網羅的に記述し、全体的な枠組みを示した翻訳学の「地図」である。ホームズの目標は、「翻訳現象の記述」から「翻訳理論」を導くことだ。「記述」すべき翻訳現象の三つの焦点の例を次に挙げる。

- ① 産物物一起点テキスト－目標テキストの組み合わせや、一つの起点テキストに対する複数の目標テキストの比較分析など、テキストの記述。
- ② 機能－翻訳を受容する社会文化的状況 (例：いつ、どこで何が訳されどのような影響を与えたか)、つまりコンテキストについての研究のような翻訳機能の記述。
- ③ 過程の検証－翻訳者の心理に注目し、訳出過程を言語化し記録するような、認知的視点に立った記述研究。

その他、ホームズは「記述」「理論」に加えて「応用」という軸を設けているが、これは、社会や言語教育の場における翻訳の位置のような翻訳政策にかかわる問題を扱う。

1970～1980年代、比較文学やフォルマリズムを起源とする記述的アプローチ、文化志向のアプローチが影響力をもつが、当初盛んであった言語学的研究はドイツ以外では衰えてしまう。1990年代以降の展開は、カナダのサイモンによる翻訳とジェンダーに関する研究、ベンガルのニランジャナ、スピヴァクのポストコロニアル翻訳理論、そしてアメリカのヴェヌティによるカルチュラル・スタディーズ志向の分析などに向かっている。さらに、グローバリゼーション、社会学、歴史学、コーパス言語学、視聴覚翻訳、コンピューター支援翻訳研究を促進したテクノロジーなどと、あらゆる方面に関心は広がりつつある。

ここに確認した翻訳学の成長は、つまり、ホームズの地図への書き込みがさらに加えられ充実し続けているということに他ならない。翻訳の歴史上、研究の対象は当然言語現象や意味に向かい、語やテキストレベルの検討がまず行われてきた。ホームズの提示した「記述」研究の②や③、あるいは「応用」は、当時の新しい観点であり、現代的翻訳学を特徴づけるものだと言えるだろう。翻訳学者の関心は、テキストの言語研究から、翻訳者自身、翻訳者の行為、そしてそれらを取り巻く文化社会的環境へと移り広がり、それに伴い、隣接領域の理論の借用などによって方法論も多様化している。

以上のような要点の他、翻訳学は、学としての独立を主張する以前に生み出されてきた、聖ヒエロニムスやルターの聖書翻訳に関する翻訳論やシュライアーマハーの解釈学なども、その視野に入れている。ところで、「翻訳」というものの自体の本質やそこに内包される諸概念の考察なども行われているが、それは、ラドミラルが洞察した如く、根本的に哲学的な次元を要請する。西洋の哲学者の翻訳への関心は、ベンヤミン、ハイデガー、スタイナー、デリダに見られるように、一つの流れを形成していると思われる。

ではここで、翻訳と解釈の問題に立ち返るため、フランスの翻訳学に目を向けることにする。

翻訳学に見る「解釈」

フランスにおける現代の翻訳学からは、哲学的思索を織り込んだ研究が出ている。ここでは、アントワヌ・ベルマン（1942～1991）を取り上げ、翻訳と解釈の関係について考えてみたい。

主著『他者という試練』⁶⁾の中で、ベルマンは、ドイツロマン主義の翻訳理論を検討し、また、おそらくこの研究がその根底の主要部をなしたと思わせる、彼自らの翻訳学の規範を表明している。シュライアーマハーの解釈学的翻訳論はベルマンの関心事の一つだが、ベルマンが解説したこの解釈学者の考える「解釈」の意味とは何であるのか。以下、要点を追ってみる。

シュライアーマハーの近代的な解釈学は、すでに触れたとおり、聖典の解釈法を規定する伝統的な解釈学とは根本的に異なり、「理解」のための理論、しかも、「間主観的理解」の理論であった。テキストの理解は、どこまでも「主観の表現的産物」の理解でなければならない。従って、そのようなテキストを「読解」する過程には主観と主観のコミュニケーションが生じるのである。また、テキストの理解とは、そこに現れる「客観的な言語現象 *phénomène de langage objectif*」の理解でもあるのだが、そのような言語現象の表現者によ

てというよりも、むしろ文化史的意味での言語現象の状況によって決まってくる。実際に使われる言葉 (langage) は、間主観的な表現であるので、意味の不透明性からは免れない。解釈学はこのような言葉と必要不可欠な関係にある。というのも、解釈学とは言葉の「意味を掘り起こすこと」に他ならないからである¹⁷⁾。

このような言語観をふまえて、シュライアーマハーの「主観理論」に基づく翻訳論は展開される。そこでは、翻訳者、通訳者、作者、読者などの「人」が問題となり、翻訳は「間主観的な行為」と見なされるのだ¹⁸⁾。そして、翻訳をその段階という観点から検討する中で、シュライアーマハーは、「翻訳 traduction」と「通訳 interprétation」を比較する。フランス語では「通訳」と同じ語で表わす「解釈 interprétation」については、シュライアーマハーにおいてどのように読み取れるであろうか。「広い意味での翻訳」の考察から始まっているが、そのベルマンによる解説は次のとおりである。

ディスクールを解釈し (interpréter) なければならない場合には、必ず「翻訳」(traduction) することになる。つまり、外国人に自分の言語ではない言語で話しかけられたり、田舎の人にお国の言葉で話しかけられたり……した場合、我々は「翻訳」という行為に及ぶのである¹⁹⁾。

ここで、括弧つきの「翻訳」はいわゆる翻訳の意味ではなく、「解釈」の同義として使われているはずだ。括弧つきであるゆえに、「解釈」との差異を問う理由もない。ベルマンは、「コミュニケーションはある程度まで翻訳＝理解の行為だ」とも述べている。要するに、翻訳は、理解すること、解釈することと差をつけ難い近きにある行為なのである。

では「翻訳者」と「通訳者」には差異があるのか。それはどのようなものか。シュライアーマハーによる差異の段階的な説明を以下に示す。

- ① 通訳は「ビジネス」により関係のある職業だが、翻訳は「学問」や「芸術」の分野により縁が深い。本質的に、通訳は話す行為、翻訳は書く行為だという違いもある。
- ② 「客観的」か「主観的」かによる区別がある。単に客観的な内容を伝えるだけの場合は、書く、話すのどちらでも構わないが、通訳と言い、学問、芸術などで自己の考えを述べる場合は、翻訳と言う。
- ③ 通訳の場合は、言葉は意味的深みのない純粹な名称となる。その場合、言葉は意味内容をもたない単なる伝達手段である。これに対し、文学や哲学の分野において著者とテキストは、言語 (langue) の変化と主観の表現が同時に起こるということのような、言葉 (langage) との二重の関係において考えられる。要するに、言語体系の中に一つの主体による言語表現が生まれるのだ。この二つの次元は、区別されると同時に結合するもので、「解釈学者 herméneute」と翻訳者の両方にかかわりがある。哲学や文学は主観的な分野だと言えるが、この「主観的」は、通訳の分野が扱うテキストには存在しないような母語との「親密さ」も指す²⁰⁾。

ているのは興味深い。意味の理解を使命とする解釈学者も翻訳者も、徹底的に主観的な役割を担う存在であるとされている。対置される通訳者は、深みのない言葉の表面を扱うだけで、理解を必要とせず表現力に乏しい役割に徹していればよいということのようである。これが、「客観的」と見なされるものだ。換言すれば、通訳者は翻訳者ではなく、解釈を免除された者ということになる。これは、日仏間、あるいは日英間のような、言語体系の大きく異なる言語間の通訳や翻訳の立場から見ると容認できないようにも思えるが、その議論は控えて取りあえずまとめると、通訳は解釈でも理解でもないということであろう。

さて、ベルマン自身は解釈について自らの直接的な見解を示していないが、彼の翻訳学における、例えば「分析」という概念の根底には、解釈の問題が横たわっているように読み取れる。翻訳者は、翻訳実践を脅かし、無意識的に言語表現レベルに影響するゆがみのシステムを見つけ出し、そして分析しなければならない。テキスト分析はもちろん翻訳において不可欠な過程であるが、これに加え、翻訳実践自体の翻訳者自身による分析が必要なのである。翻訳という運動が、テキストに潜在するシステムを明かすのである²¹⁾。このように、ベルマンの「分析」は見えないものを見えるようにさせること、つまり解釈の別の形であると言えるだろう。

解釈と翻訳の差異はあるのかという問いに対して、本稿では、研究の展望を示すことはできた。古代ギリシャの聖書翻訳を背景として、*interprétation* と *traduction* は *hermèneuein* の下でつながりながらも、区別されていた。シュライアーマハーも、通訳者 (*interprète*) と翻訳者 (*traducteur*) の言葉に対する関係を明らかに区別して言語・翻訳を理論化した。しかし、今日的ないわゆる翻訳と解釈の意味での二つの語が示す行為は限りなく近く、境界線を引く根拠は今のところ用意できていない。今後はこの草稿に基づいて、*hermèneuein* を起源とする複数の語のラテン語、フランス語、英語、ドイツ語等におけるヨーロッパ言語の歴史的研究、シュライアーマハー以降の解釈哲学者による「解釈」理論の研究、翻訳学者における「翻訳」理論の研究という、主に三つの方向から、本格的に思索を深めてゆきたいと考える。これが、「翻訳学」にまた一つの新たな哲学的翻訳研究を開くことになるであろう。

註

- 1) 安西徹雄・井上健・小林章夫編『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社、2005年、11頁。
- 2) 文法学者ジル・メナージュ (1613~1691) の表現。ニコラ・ペロ・ダブランクルの翻訳を批評し、「トゥールで愛した美しくも不実な女性を思わせる」と述べた。Henri Meschonnic, *Poétique du traduire*, Lagrasse, Éditions Verdier, 1999 pp. 43-44.
- 3) 「翻訳と解釈の差異」に関する問題意識は、執筆者による講演「翻訳と近代日本哲学の接点」(京都大学「日本哲学史フォーラム」2008年12月20日)中、関西学院大学准教授 Hans Peter Liederbach 氏から寄せられた「翻訳と解釈は同じではないか」とのご指摘に端を発したものである。Liederbach 氏は和辻哲郎の解釈学に造詣の深い研究者であるが、翻訳学を専門領域とする執筆者に、一見見落としがちであるが実は根本的な問題をご提示くださった。この場を借りあらためて、感謝申し上げる。
- 4) 翻訳学は北米を含む西洋で生まれ、現在、北米でも盛んであるが、ここで扱う語の語源は当然ヨーロッパにあるという意味で、ヨーロッパに限定する。
- 5) *Organon: I Catégories, II De l'interprétation*, traduction nouvelle et notes par J. Tricot, Paris, J. Vrin, 1994 を参照。

- 6) Barbara Cassin (dir.), «Traduire», *Vocabulaire européen des philosophies*, Seuil/Le Robert, 2004, pp.1305-1307.
- 7) *Ibid.*, pp.1309-1310.
- 8) *Ibid.*, p.1310.
- 9) *Ibid.*, p.1307.
- 10) 1480年にはまだ、ラテン語の *traducere* は「翻訳する」という意味を得ていなかったようだ。フランス語の辞書 *Le Nouveau Petit Robert* (1993), p.2557 では、*faire passer* (「通す」「移す」「伝える」というほどの意味か。) の意味であったとしている。
- 11) ジェレミー・マンディ『翻訳学入門』鳥飼玖美子監訳、みすず書房、2008年、7頁。
- 12) Jean-René Ladmiral, *Traduire: théorèmes pour la traduction*, Paris, Tel Gallimard, 1994, p. XVIII.
- 13) *Ibid.*, p. VII.
- 14) Jeremy Munday, *Introducing Translation Studies*, New York, Routledge.
- 15) 前掲書、マンディ (2009)、14~22頁。
- 16) 本稿では Antoine Berman, *L'épreuve de l'étranger—Culture et traduction dans l'Allemagne romantique*, Paris, Tel Gallimard, 1984 を参照しているが、和訳も刊行されている。『他書という試練—ロマン主義ドイツの文化と翻訳』藤田省一訳、みすず書房、2008年。
- 17) *Ibid.*, Berman (1984), pp.227-229.
- 18) *Ibid.*, p.231.
- 19) *Ibid.*, p.232.
- 20) *Ibid.*, pp.232-233.
- 21) *Ibid.*, pp.19-20.